
一寸先は闇 F O R 臆病なラビットは今異世界なう

紫苑マーク2

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一寸先は闇FOR臆病なラビットは今異世界なう

【Nコード】

N1059BA

【作者名】

紫苑マーク2

【あらすじ】

常に非日常を歩んで来た宇佐美八雲。そんな彼は非日常を嫌うようになり

日常を愛した。

しかし、今まで非日常歩んで来た彼が、簡単に日常をを歩むことはできなかった。

そんな彼に最悪の非日常が……

これは自己満足の主人公最強作品です。

嫌いな方はどうぞ見ないでやってください。

出会い（前書き）

はいいシオンどす。

いやいやPC壊れてなんかやる気なくなったから新しい小説書くことにしました。

駄文ですが見てやってください。

異世界いくの遅いかもしれません。・・・

出会い

この時間が永遠に続けばいいとおもった。

学園で糞つまらねえ授業を受けて授業が終わったら、「ああ、やつと終わった。」「放課後どうする?」

「ゲーセン行こうぜ」「いいねえ」って感じで放課後、夜遅くまで友達とあそんだり、ガクドナルドに行つてポテト摘みながらだべったりする。

それが俺の宇佐美八雲の大好きな日常^{モノ}

俺は何度も何度も繰り返し返したいと思うしできる事なら永遠に続いて欲しいと願う。

だが世界はそんなにも甘くない。

俺には非日常^{テキ}が待っている。ほとんどの奴が持っている者を俺は持つてない。

家族と言う存在だ。俺は家族つてもんがいない。

別に家族が欲しいって訳じゃない。いたらいいなあ〜って思うくらいだ。

でも普通は家族っているもんだろ?

家に帰ってきたらおかえり〜って声が聞こえるだろ?

だけど俺にはいない。だから、

ダチの家に行つたとき「おかえり〜」って聞こえたらちよつと切なくなる。

まあ色々前置きもしたが詰まるところ俺は孤児だ。別に孤児なのはどうでもいい。

捨てた親を恨んでるわけでもないし、会いたいとも思わない。

でも、気になることがある。俺は赤ん坊の頃大きなかごの中に入れられて空から降ってきたらしい。

驚いた、当時孤児院の院長をしていた、清原さんは慌てて拾ってくれたらしい。

そして、この事実を伝えられたのは、13歳の時、その話を聞いた俺は正直こう思ったね。

「冗談だろ？」ってね。

空からってそんな○ピユタみたいな話。だが清原さんが嘘つく人じやないってことは、知っている

だから俺は興味を持った訳。自分は何者なんだろうって？だから俺は真実を知るために旅に出ることを決めその翌日、孤児院を無断で去った。

その夜俺は地獄を見た。

不良に集団リンチ&かつ上げされたのだ。よく覚えてないが、街を歩いていたら5〜6人に囲まれて胸倉を捕まれ裏路地に強制的に引っ張られてリンチされた。

人に殴られたのもそれが初めてだった。

都会ぐらしのろくすっぽ喧嘩もしたことないもやしっ子が勝てるわけもなく

、ひたすら蹴られ殴られた。そして何よりも怖かったね。

体がガタガタ震えて、「許してください。」「お願いします!!」「泣きながら頼むことしかできなかった。

口からは血がでて頬はジンジンして痛い。鳩尾を殴られ、気分は最悪、本当に吐きそうだ。顔は膨れ上がりうまくしゃべることができない。

そんな俺は有り金を全部取られて適当にまるでごみを捨てるかのようになら路地のごみ溜めに捨てられた。俺はただ自分がどうしようもなく無力で己が不甲斐なくて悔しくてすすり泣くだけだった。

それから何時間たったのだろうか？
顔に雨が当たって目が覚めた。

体を起こしてどこかで雨宿りしようと思いつき立ち上がった。

だが、体中が痛くて立つ事もできなかった。それは生まれて初めての経験、孤児院では絶対に経験できない事。社会の厳しさと言うか、世界の広さ？それは盛りすぎか？

ぽつぽつと降っていた雨が一瞬にしてザアアアという音に変わった。

雨がだんだんと強くなってきた。

そんな事を考えてるうちに俺は笑っていた。なにわけわかんねえ事考えてんだろうつて。

「ククク、ハハハハハハハハ」

ほかの人が見たら頭がおかしい子供だ。

なんだってゴミの上を寝転がって土砂降りの中、爆笑しているんだから。

でも笑いが止まらない。

まさに弱肉強食これが俺の住んでる世界。

あいつらが悪いんじゃないかって弱い俺が悪い。

だから、俺はゴミだめの上で青臭く、馬鹿らしい誓いを立てた。

俺は大声でこう叫んだ。「最強になってやる。誰にも負けないくらい強くなってやる。」

「見てろよこの糞野郎！！」

誰も見てない裏路地で叫んでいたはずだった、しかし八雲はここで人生最大のミスをしてしまった。

会ってはいけないものに会ってしまったのだ。

黒い雲が空を支配していた。一目でわかる雨が降ると、雨は嫌いじや。こんな老いぼれでも目を瞑ると昔の出来事を思い出す。そこは血のにおいで充満していた。

ミサイルで多くの仲間が木っ端微塵に吹き飛ばされ、機関銃の凶弾で死んでいった仲間は数え切れない。

まさに地獄。悲鳴悲鳴その世界はそれと絶望、爆発音に満ちていた。生きている限るは祖国のために銃を取り敵に立ち向かわなければなかつた。

「まあわしの場合刀だつたがな。」

敵の悲鳴、血の匂い、肉を斬つた感覚が今でも手から離れない。

ワシはあれだけ殺しても、まだ足りないと言うのか？

「駄目じゃ駄目じゃまたこんな事を考えては、まったく何時になつたら直るんじやるか。」

ハア―とため息をついて歩き出そうとした時、吐き気がし

ゲホゲホ、

とセキをした。手を見てみると、赤い血がべつとりとついていた。

「ククク、ワシもそろそろ終わりと言うことか。」

そう言つて、老人は裏路地に消えた。

第2次世界大戦若干12歳の若さで敵を1万人切り殺した日本人がいた。

敵の凶弾を全て避け敵陣に突っ込み、敵を切り裂きまくつた。正に

神風、日本の快進撃を支えてきた英雄

その男の名前は相楽十助。瞬華閃光流の使い手

そんな彼は、戦闘機に人間を入れて敵艦隊に突っ込ませると言う明

らかに異常な日本の方針についていけなくなり、マレーシアに姿を消した。

十助が日本軍から去るときに残した言葉が、「日本は圧倒的に叩き潰され悲惨な結果になるだろう」

十助の言葉の後を辿るように、日本は連合国に惨敗した。

十助は日本がポツダム宣言を受け入れた30年後帰国した。

それから30年間殺人剣、瞬華閃光流を伝えることなく日本でただ無気力に同じ生活を繰り返すだけだった。

そんな彼が出会ってしまった。

それは偶然だったのか必然だったのか？わからない。

しかし出会ってしまったのだ。

そいつは、裏路地のゴミ溜めで昔自分とよく似た事を笑いながら叫んでいたのだ。

最強になってやる。とワシは久しぶりにワクワクした。どうも自分と同じ匂いがする。こいつになら瞬華閃光流を教えてやってほしいと思った。だからワシは急いでそいつの元に向かいこう言った。

「最強になりたいか？」と。

それがワシと糞弟子との出会い。

出会い（後書き）

感想&アドバイスよろしく

日常（前書き）

はーうシオンです。

2羽目です。

今回結構頑張りました。

では、2羽目どうぞご覧になってください。

日常

「最強になりたいか？」

「あ？」

俺はいきなり現れた不適に笑う老人に質問した。

「あんた誰だ？」

「ワシか？ただの年金暮らしじゃが？」

「ふざけるなよ。ただの爺さんが足音消して近づいてくるか。」

そう、こいつは普通聞こえるはずの足音がまったく言っていないほど聞こえなかった。上しか向いていなかった俺にはいきなりパツと出てきたと勘違いしてしまうほどだった。

しかも黒い短髪で、おまけに顔に青い炎のような刺青が入っている。どう見ても不審者にしか見えない。

「もう一度聞くんた誰だ？」「俺に何の用がある？」

俺は警戒を強め言葉を捲くし立てた。

「ふおおお威勢がいいのう。」

「都会暮らしの喧嘩のやり方も知らないもやし君風情で。」

「どうした？その顔ボコボコじゃないか？不良にでもやられたか？」

「てめえ質問に答えろよ！！糞ジジイ！！」

俺はきれていた。安過ぎる挑発だった。いつもなら簡単にあしらうのに、このジジイが生理的に気に入らない。

お前らもあるだろう？会った瞬間からこいつ無理だわって奴。

今の俺は不良にボコられて立つのもやっとだった喧嘩なんかできる体力なんてないに等しい、でもそんなのは関係ねえ

「ぶん殴つてやる！！」

俺は老人に向かっていった。

「吼えるなよ小僧が喧嘩のやり方を教えてやるわい。」

老人が叫んだ瞬間、老人から殺気が爆ぜた。

俺は突進していた脚を止めた。

おいおいなんだ？このでたらめな恐怖は、あと5m進んだら首を斬られて殺される。

そんな未来が見えた。いやそんな気がした。

糞、無理だ今の俺じゃこいつには敵わない。場数が違う。今、目の前にいるのは本当に人間か？

さっきの不良なんかとは格が違う。ははは膝がわらってやがる。

「ふむ、ただの都会育ちだとおもったがなかなかいい勘しておる。」

「だが、お前とワシの実力差は明白、ワシは不良と違って弱い者いじめは嫌いなんじゃ。」

「今なら土下座で勘弁してやるぞ」

老人は不適に笑いここにと言わんばかりに指で地面をさした。

俺はペツと唾を吐き「冗談、死んでもごめんだね」

そう言っ駆け出した。

「いい度胸じゃ、見せてくれお前の可能性を、そのボロボロの体でどんな策を使うんじゃ？」

「興奮してんじゃねーぞ気持ち悪いんだよ糞ジジイ。」

「悪いな、そういう性分なんじゃ」

そう言っジジイもこっちに向かっ走ってきた。

糞ジジイの間合いまであと3m、2m、1m

俺は糞ジジイの間合いに入ったが、糞ジジイは何もしてこなかった。そう完全に舐められていた。

「その余裕が気に入らねーんだよ！！」

俺は叫びながら思っつきりジジイの顔を殴りつけた。が、

「なっ！！」

「言ったじゃろ？お前は威勢がよすぎるんじゃ。」

ジジイは柳のようにスルツと俺のパンチを綺麗に避けて「なんだその程度か、がっかりじゃもっ面白っことを期待してたのにお」
そう言っ

思っつきり俺の鳩尾に拳を突き刺さそうとしてきた。

だが、奇跡的に運がよかったのか、わからないが、ジジイの拳はあばらに当たった。

ぐああ・・・

一瞬気が飛びそうな痛みが俺を襲ったが、もはや気合で意識を保った。

ジジイは何をしているのか知らないが、絶好のチャンスなはずなのに、惚けた顔で呆然と俺を眺めていた。

俺は今ある全力の力を込めてジジイの顎に頭突きをかました。

ジジイは俺の頭が近づいて初めて自分の立場を認識したようで、回避行為をとったが、

「遅いんだよ!!!」

俺の頭突きはジジイの顎を打ち抜いた。

自分にも頭に少し衝撃が来たが、別に耐えられない痛みじゃなかった。ジジイは仰向けにボタンと倒れた。顎にもろに当たったのだもはや立つことも無理だろう。

俺はジジイに中指を立てて「どうよ？効いたろ？今の一撃、都会暮らし舐めんなよ!!!」と言っておいた。

だが、俺自身もふらふらで今にも倒れそうだった。

「まったくなんて日だ人生で一番厄日だったんじゃないかねえのか？」

「不良にぼこられるわ、頭おかしい糞ジジイに会うわマジ最悪だわ。」

「まっいつか、じゃあな糞ジジイもう一生会いたくねーわ」

俺は手を振って後ろを向いた瞬間、俺は中に浮いていた。

おれは、な？という素っ頓狂な声上げ背中からアスファルトに受身もとらずにガンと言う綺麗な音を立てておちるのであった。

「いってえー」

俺はアスファルトの上でのた打ち回った。

「フン、誰が頭の可笑しい糞ジジイだつて？糞ガキ」

俺を投げたのはそうほかでもないさつき倒した糞ジジイだった。

「ぶざけんな、糞ジジイ、」

「受身ぐらいとれ馬鹿弟子」

「無理に決まってるんだろ！！都会暮らし舐めんな。狸ジジイ」

うん？俺はここである異変に気づいた。さっきジジイが発言思い出してみた。

「受身ぐらいとれ馬鹿弟子」

うん？俺の記憶がおかしいのか？まあ人間満身創痍の時くらい聞き違いぐらいするだろう。念のためもう一回聞いてみよう。

「ジジイさっき何て言った？」

「受身ぐらいとれか？」

「違う違うその後だ。」

「馬鹿弟子」

ジジイは涼しい顔でそう吐きやがった。

俺はハアーとため息を吐きどうしたものかと考えていると「なんじや？嫌そうにしてお主からワシに師匠

なつてください！！と言って来たじゃないか、だからワシも嫌々仕方なく弟子にしてやってると言うのに。」

「言つてねえよ！！！」

俺は盛大に突っ込みを入れた。

「俺はあんたみたいな奴に付き合ってる暇はないんだ。」

そう言つて俺は踵を返した。

「お主は最強になりたくないのか？」

俺は後ろ向きで「ああ、なりたいね。だからこんなところで道草食ってる暇は無いんだ。」

「そうか、お主名は、なんという？」

「八雲だ。」

「じゃあ八雲ワシの弟子になれ、お前にワシの全てをたたきこんでやる。」

「あのな爺さん、あんたしつこ」俺はしつこいと言おうとした。だが俺の喉元には、どこから取り出したのか、刀があった。

「隙がありすぎじゃ八雲お主死んでいたぞ？」

ジジイの目は今日会った中で一番真剣な目だった。

「わかった、降参だ。あんたは企画外に強い、だったら俺の事も強くしてくれ、頼む。」

俺は頭を下げた。

「このうっけ隙を見せるなど言うところがあー！」

ジジイの首刀は俺の後頭部に吸い込まれていった。

薄れる景色の中俺は思ったね、この糞ジジイやっぱり嫌いだと。

その後俺は、ジジイの地獄の特訓を経て3年後、2代目瞬華閃光流の正統後継者になった。

俺が後継者になった1週間後、ジジイは死んでしまった。もともと長くは無かつたらしいが、

山の中で、タバコを吹かしながら、眠るように息を引き取った。

死に際に、俺に宇佐美という苗字といつも大事そうにしていた銀色の指輪をくれた。まあその話は、また今度ということで、そこでジジイが死んでからすぐ俺はジジイのコネで東双海高校に転校した。めんどくさいが、高校くらい卒業してないところくな職業につけないので、仕方なく高校生になった訳だ。

俺の風貌は顎まで垂らした赤髪の前髪、後ろ髪も背中まで伸びている。まあ簡単言えば、テレビから出てくる某幽霊に似ている。

しかもある事件で俺は片目を失っているので眼帯するのもめんどいのでこの髪型は目を隠せるので一石二鳥の髪型ってわけだ。まあこの髪型のせいで、転校当初は気持ち悪るがられ、不良達に喧嘩を吹っかけられたが、持ち味のスピードで逃げ回った。まあ本気で戦えば一瞬で勝てる相手だが、東双海高校の理事長、双海総一郎にあんまり問題を起こさないでくれと釘を刺されているので、逃げることに専念したって訳だ。

それで色々な喧嘩から逃げた俺についたあだ名が、臆病なラビット。

なかなかおもしろいし、あながち間違っていない不名誉あだ名を付けられている俺には、友達ってもんがあんまりできなかった。別に友達が100人欲しいとは思わな

かったし、俺のダチはなかなかユニーク
でももしろいし、一緒にカラオケ行ったり、ゲーセンでカクゲーで
バトルしたり、家で一緒にAV見たりそういう普通の男子高校生の
日常が好きだった嫌、愛していたと言っても過言ではない。だから
俺は、この時間が永遠に続けばいいと思った。

だが、高1の春、もうすぐで高2なるそんな時に、その日常が音を
立てて崩れるたんだ。

日常（後書き）

人物紹介

2話終了時、名前宇佐美八雲

今小説の主人公2代目瞬華閃交流の使い手で性格は結構S成分があるが、日常をこよなく愛し、また友達思いだが、態度にはあまり出さない。

学校で売られた喧嘩は買わないが、他校からきた不良には一切手を抜かない。

ボコツた後に財布とメールアドレスを必ず押さえ、まだ歯向かってこようならば

本人の恥ずかしい写真をインターネットに流す。彼曰く、不良のおっ金は俺の物と

鼻歌交じりに友達に言っているらしい。事実食費のほとんどが、不良から有難く頂いたお金とか……。

東双海高校では、チキンなラビット、臆病なラビットで有名だが、彼の实力を知っている親友たちは、あれはウサギなんかじゃない鬼だと言っているが、学校の生徒は誰一人として信じてない。

趣味は筋トレと不良狩りと昼寝

好きな食べ物
吉田屋の牛丼。

彼にとっては、吉田屋こそが彼の聖地らしい。

容姿

身長 184 cm

体重 86 kg

髪型

糞ロング

髪の色赤
目の色紫

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1059ba/>

一寸先は闇FOR臆病なラビットは今異世界なう

2012年1月9日03時45分発行